

## 良識ある保守主義・情報公開

# 吉田つとむ

町田市議会議員 4期連続トップ当選

＜編集発行＞

〒194-0011 町田市

成瀬が丘 1-14-12

サンホワイト E103-13

自宅 042-795-7361(fax 兼用)

市議会議員 吉田つとむ

yoshidaben@gmail.com



## 白米の千枚田と、農業世界遺産「能登の里山里海」②

2025年4月に現地を訪れた時は、白米の千枚田の中間を抜ける国道249号線のところや、白米の千枚田の展望台駐車場（道の駅千枚田ポケットパーク）の位置から、すぐ下にある棚田を小型耕運機やスキを持った人々が田起こしをしていました。他方で、そのすぐ上の棚田では、上から水を張っていました。1004枚の棚田全部にこの作業を施すのは、多大な手間でしょう。保存の基金を基にした公益財団法人白米千枚田景勝保存協議会が、この全域の保存活動をしています。関連する支援では、道の駅千枚田ポケットパークが国の道の駅認定を受けており、一般の消費者などが参加する白米千枚田オーナー制度があり、ボランティアによる耕作協力の方法が取り入れられていますが、そもそも米の収穫量

(AI記載: 2024年9月3日時点の白米千枚田の稲の収穫量は、地震の影響で発育不良な稲もあり、約700キロと見込まれていました。)からして、「農業」としての收支が賄いきれないと思いました。

今後、観覧者の観覧料収入を公益財団法人白米千枚田景勝保存協議会の収入に見込む必要性があるのではないかでしょうか。自分がこの白米の千枚田を眺め、その農作業（田起こし）を見て、田植えや稻刈り作業が観覧料を払っての見学に相当すると思いました。この時期、道の駅千枚田ポケットパークの店舗営業は休止されており、自動販売機だけでした。道路復旧整備がまだ未完であり、観光バスが走る、あるいはマイカー、レンタカーが自由に走行できる環境は整っているとは言えません。また、主要道路のコンビニ店などのトイレ環境整備の徹底は何より重要でしょう。(終わり)



## 輪島塗の現状と未来の展望②

前回の記載では、伝統産業の輪島塗が産業として衰退してきたことを、事業所数、就業人口、生産高について資料から分析しました。また、自分がいた伝統産業の博多人形の業界と企業が衰退していく様を体験的に過ごしていく中で見てきました。



そのことから比して、高い漆塗の技術を持った輪島の事ゆえ、衰退していくことに未練は持たず、新しい分野を開拓していくことに、その技術が生かされて来るでしょう。いくばくかの工芸美術品を編み出しても、その成功者の工房は限られます。要は一般の人に愛用されることが肝心で、一般の家庭の生活の中で、家族の食事のあり様において、汁椀（カップ）と皿と大皿、箸や匙（スプーン）、フォークなどにも持ち入れられるデザインや色や細工が洋食器製造にも拡大する必要が欠かせないでしょう。

ネットの世界では、「ひろゆき氏」が、輪島塗の芯漆という技法の製品づくりをする人を支援しようとクラウドファンディングを推進しているそうです。自身でもその作品を購入した話をSNSで発信しています。それはそれで結構なことだと思いますが、端的に言いますと、そこで支援の対象となるのは業界の数人とその工房の範囲にしか過ぎないものです。(続く)

\*被災地の輪島市では、まず輪島塗会館を訪ねました

○支持政党なしの方々の代表=吉田つとむの基本理念は、良識ある保守主義です。

○吉田つとむは、「若者育成」をトップの政策に掲げています。

○水耕栽培メロン 世界一決定戦を開催しよう！

町田市議会の無所属会派は、政党に所属しない議員3名で構成し、明快な議論を提起します。

若い世代の育成に全力をささげる  
町田市議会議員(支持政党なしの方々の代表)

# 吉田つとむ



ブログ

個人HP



メールは  
左記を読み込  
して送信



好評インターンシップは、第55期生が終了しました。

## インターン体験記⑬森田 瑛斗

### 町田消防署訪問：救急体制を視察見学

町田消防署にて、施設の見学をさせて頂いたのち、救急隊の活動についてお話を伺いました。ポンプ車は2台セットで動くことを基本にしていることで、一台が火に近いところで初期放水を担い、もう一台が消火栓から水を取ってくる役割を担うとのことです。初期放水を行うポンプ車には最初から2トンもの水が積まれているとのことですが、それでも2分程度でなくなってしまうという点は驚きました。



特に救急の話の中で興味深かったのが、Live119と呼ばれる、119番通報者がスマートフォンで現場の映像を災害救急情報センターに送信することが出来るシステムです。応急手当の方法を必要な場合にはビデオを送ることで、適切に指示することが容易になるとのことでした。また、患者の意識状態なども確認することができるため、重症と見受けられる場合には早期から受け入れ可能な三次救急の病院を探せたというケースもあったとのことです。口頭のみの連絡だと通報者の主観が入ってしまうというデメリットがありますが、ビデオだと得られる情報も多く、スマート社会の恩恵を感じます。

熱中症の多い夏、インフルやコロナの増える冬は特に救急要請が多く朝の出動が深夜まで及ぶこともあるそうです。また高齢化に伴い、75歳以上の救急要請が特に増えており、救急出場件数は増加の一途をたどっています。一方、救急隊の方々の働き方改革の流れもあり、より効率的なシステムの構築や、国民全体の救急医療に対する知識や最低限の初期対応を出来るような教育の必要性を痛感します。

東京大学医学部新卒 森田瑛斗（第55期生）

## インターン体験記⑭森田 �瑛斗

### 民間企業による保健衛生事業を学ぶ

町田市を本拠とする民間企業であるか株式会社町田予防衛生研究所に伺いました。町田予防衛生研究所は食品の検査や検便、コンサルティングなど食品衛生にかかるサービスを多角的に展開している企業で、全都道府県で取引を行っています。給食サービス（学校、医療施設、事業所食堂、寮など）や保育園・幼稚園、卸売・小売りなどが取引先となっており、規模も様々だと伺いました。食品衛生にまつわる知識や企業の取り組みについて教えて頂いた後、実際に検査をしている様子や検便の検査を行う機械なども見学させて頂くことが出来ました。



食の「安全」「安心」とは一体何かという点は時代や地域によっても変わっていくもので、そうした中でニーズを捉えながら食品衛生に取り組むという点が企業のモットーだとお話しされていたのが非常に印象的でした。また、お話しの中で、1990年代に日本からフランスに輸出したホタテガイから基準値以上の貝毒が検出されたことに起因して、一時は日本産水産物の輸入がEU全体で全面的に禁止されてしまい、結局ホタテガイの再輸出まで2003年までかかってしまったという事例を紹介していただきました。食の安全が担保されていないと思われてしまった場合には企業だけでなく国家全体にも大きな影響を及ぼし得ることを知り、食品衛生の重要性を痛感しました。食品を適切に管理しているということを客観的に証明するということの需要の高さがうかがえます。町田予防衛生研究所が今後どのような事業展開を行っていくのか注視していきたいと思います。

東京大学医学部新卒 森田瑛斗（第55期生）

◎吉田つとむのインターンシップは1998年に開始、2025年3月末までに111名が参加しました。

◎ 第55期インターン生の森田瑛斗さんは、医師国家試験に合格し、4月1日から研修医として社会人。

◎次回のインターンシップは、2025年夏季第56期生の募集を開始しました。